二〇二二年度 群馬県立女子大学文学部国文学科 一般選抜前期日程試験問題

国語

（一〇〇分）

（注意事項）

1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。

2 問題冊子は一冊（1頁から17頁）、解答用紙は二枚（問題一用紙と問題二用紙）あるので注意すること。

3 用紙の脱落や汚れに気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせること。

4 試験開始直後に、各解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入すること。

5 解答は、すべて解答用紙の解答欄内に記入すること。

問題一

（一〇〇点）

（一）次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

語り得ない何かが、語ることを求める、そう感じるようになった。言葉だけでは表現できないから人は、表情や身振りあるいは沈黙を用いて、どうにか自分の心情に姿を与えようとする。電話のように姿が見えないときは声色によってそれを補う。

ここでの「語る」には、話すことだけでなく、書くことを含む。すると私の場合、その実感は、いっそう深まってくる。書くとは、言葉によって何かを表現し、伝達しようとする試みでもあるが、書く人の中にあって、言葉になろうとしないものを、はっきりと感じ直そうとする行為である。

①そうしたおもいは、ことに大切な人に手紙を書くときに抗しがたいほど強く感じられる。すべてのおもいが記された手紙など、おそらく存在しないだろう。人は書けば書くほど、言葉にならないおもいを深めていくからである。

「おもう」という営みは、私たちが日ごろ感じているよりもずっと複雑な構造をしている。ひらがなには多種多様なものを包むはたらきがある。いっぽう、漢字はあるはたらきを際立たせる。「おもう」という動詞に漢字を当ててみる。その多様さに驚くことになるだろう。

「思」「想」「憶」「懐」「顧」「忖」「恋」「惟」「念」、これらはすべて「おもう」を意味する。

時間的にいえば過去、現在、未来にわたり、意識界、無意識界の両界を貫き、相手の心を忖度するところから祈念までを包含する行為が「おもう」の一語に包含されているのである。

どうして「おもい」を正確に表現することなどできるだろう。さらにいえば、人は自分が何を「おもって」いるのかを知らない。話すときも書くときも、人は言葉を自由に扱っているように感じていても、②現実は必ずしも実感と同じではない。だからこそ、私たちは不用意に人を傷つけることもあれば、闇に光をもたらすような一語を発するこ

ともある。

問われて答えたのではなかった
そのことばは涙のように
私からこぼれた

辞書から択(えら)んだのではなかった
そのことばは笑いのように
私からはじけた

知らせるためではなかった
呼ぶためではなかった
歌うためでもなかった

③ほんとうにこの私だったのだろうか
それをあなたに云(い)ったのは
あの秋の道で
思いがけなく　ただ一度
もうとりかえすすべもなく

「ことば」と題する谷川俊太郎の作品だが、これほど平易な表現で言葉と心の関係を歌い上げた詩をほかに知らない。

涙は、悲しみのときだけでなく、深い感動、歓喜のときも湧き上がる。言葉はしばしば意識の壁を乗り越えて世に現われる。同じ涙が存在しないように、人は同じ言葉を二度口にすることはできない。同じなのは表記だけで、意味も響きも律動も二度と繰り返すことはできない。すべての言葉が「もうとりかえすすべもな」いものであることを、人はどれほど感じ得ているだろうか。自分が発した言葉だけでなく、自分が受け取る言葉もまた、厳密な意味で繰り返されることはないのである。

詩とは、消えゆくことを宿命とした言葉を彼方(かなた)の世界からこの世界に引き戻そうとする試みにほかならない。それを読む者は、記された言葉の意味を理解するだけでなく、それらの言葉が生まれた場所に本能的な郷愁を覚える。このとき言葉は人を永遠界へと導者になる。別な言い方をすれば、永遠とのつながりを真に求めるとき、人は誰も内なる詩人を呼び起こすことができる。詩は、世に詩人と呼ばれている人だけの営みではないのである。

辞書に掲載されている意味は、私たちが社会生活を送る上で不自由がない程度の妥当性をもったもので、個々の人生にとって裏打ちされたものとは姿を異にする。

どの言葉にも複数の層がある。誰が見ても近似したものを感じる記号としての層の奥には、その人だけが感じる実存の層があり、さらにその奥には個々の実存的体験を包み込むような象徴の層がある。詩人とは、④記号としての言葉を、実存的経験を媒介にしながら象徴へと新生させる者たちの呼び名だと考えてよい。

ここでは、実存の言葉と象徴の言葉を「コトバ」とカタカナで記すことにする。コトバは、必ずしも言語の姿を取るとは限らない。言葉の奥には言語になる以前のコトバがうごめいている。難しいことではない。恋する者の心を想起すればよい。恋慕の情はたしかに烈(はげ)しく存在しているが、それは容易に言葉にならない。美しいものにふれたとき、

極度の悲しみを経験するときなども私たちはコトバの存在をありありと感じている。コトバは、言葉を超えて出現するうごめく意味、生ける意味そのものだといってよい。

（若松英輔「コトバを感じる」による）

問1　傍線部①「そうしたおもい」とはどういうものか。説明しなさい。

問2　傍線部②「現実は必ずしも実感と同じではない」とはどういうことか。説明しなさい。

問3　傍線部③「ほんとうにこの私だったのだろうか／それをあなたに云ったのは」とあるが、この思いが生じるのはなぜか。説明しなさい。

問4　傍線部④「記号としての言葉」とはどういうものか。説明しなさい。

（二）次の文章は岡田暁生（あけお）『モーツァルト』の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「永遠の愛」とか「真善美」といった倫理道徳に対してモーツァルトが時として見せる、ぞっとするような冷笑――もちろんここには彼の個人的な資質も関係していただろう。モーツァルトはいわゆるアンファン・テリブル[注1]だった。早熟で、目から鼻へ抜けるように利発で、無邪気に意地悪く、大人の偽善をあっという間に見抜いてしまう若者だったはずだ。ザルツブルク大司教への反発が典型だが、権威主義が背後にちらつく「真面目でごりっぱで重々しい」社会通念に対して、彼はいつも生理的な嫌悪を隠さなかった。

しかしモーツァルトに限らず、そもそも一級の芸術家というものは、世のきれいごとを鵜呑（うの）みにするお人よしではつとまるまい。彼らは例外なく①悪魔のリアリズムを自分のなかにもつ。それはすなわち、しばしば冷淡と感じられさえする人間洞察の透徹のことだ。私たち凡人には「見えているのに見えていない」ことがいろいろある。自分が見たくないものに対して無意識に目をふさぐのだ。情に流されるからといってもいいし、真実を直視して自分が傷つくのが怖いこともあろうし、思い込みからそうする場合もあろう。しかし芸術家は直視する。それが凡人をぞっとさせる。

これを「芸術家は冷たい／怖い」などといってはいけない。ある意味で②彼らは科学者と同じことをしているだけ。「こうあるべきだ」とか「こうあってほしい」とか「こうであるはずだ」といった希望的観測や思い入れや思い込みを、科学は厳しく禁じる。そういう中途半端な情緒こそが実験結果改ざんの類の温床なのだから。天才的な芸術家たちも同じなのだ。彼らはいわば「人間観察の科学者」であって、真理や法則を「ありのまま提示する」ことに徹する。容赦ないその洞察が、時として周囲に冷酷と見える。まさにこのような意味においてモーツァルトは、天才的な作曲家という以上に、しばしば天才的な「人間観察の科学者」であった。

たとえばオペラ『コシ・ファン・トゥッテ』について考えてみる。あらすじは前章を参照してほしいが、この物語は科学的証明の手続きに正確に従って組み立てられている。まず登場人物たちは「男女の永遠の愛は存在するのか？」という疑問の前に立たされる。「問い」である。狂言回し役の哲学者ドン・アルフォンソは「そんなものは存在しない」と主張するから、「仮説の設定」といってもいいかもしれない。その次に来るのが「検証」だ。実験してみるのである。「許嫁（いいなづけ）との愛は永遠だ」と信じる若い男二人は、変装して互いのパートナーを取り替え、はたして女性たちが陥落する（浮気する）かどうか検証する。実験結果は……「みんなこういうことをする（浮気をする）」と証明される。

すでに述べたよう、『コシ・ファン・トゥッテ』というイタリア語のタイトルは、「すべての女性は（＝男も女もすべて）こういうことをする」の意味である。口先では「永遠の愛」などといっていても、みんな目の前に素敵な異性が現れて愛をささやいたら、あっという間に元の恋人のことなど忘れてしまい、たとえ③ぬか喜びであっても、知らぬが仏で新しい恋に突っ走る、人間とはそういうものだ――このオペラが描くのは男女関係についての「普遍法則」である。モーツァルトはいわば、恋愛関係に悩む患者に慰め言葉をかけたりせず、淡々と診察結果を伝える医者だといってもいい。

「いや、モーツァルトの音楽はそんなに冷たいものじゃない、もっと温かい人間愛にあふれているはずだ！」と反発されるむきもあろう。もちろんその通り。冷たい洞察と人間愛は両立する。そしてまさにこれがモーツァルトの音楽の一筋縄ではいかないところ、その深さだ。情緒に流された洞察は常に精度が甘い。そして安直な慰め言葉は、窮地にある人にとって、何の役にも立たない。氷のような事実認識だけが、次のステップを示してくれる。④絶望を突き詰めることによってしか希望は生まれない。このような意味において、モーツァルトの音楽においては、冷徹と人間愛とが両立しているのである。

具体例はいくらでもあるが、ここでは一箇所だけ、『コシ・ファン・トゥッテ』の大詰めについて語ろう。その貞操を疑うことがなかった自分の恋人たちがどちらも陥落してしまった事実に直面し、絶望のあまり言葉を失っている男たちは、観念したように二度、「コシ・ファン・トゥッテ（みんなこういうことをする！）」と繰り返す。結婚式が始まる直前の場面なのですぐにわかる。とても印象的な箇所だ。このセリフをモーツァルトがどう作曲したか。

まず最初の「コシ・ファン・トゥッテ」は、二人の若い男にとって「人生の先生役」ともいうべき哲学者ドン・アルフォンソによって、声を潜めて歌われる。「コ・シ・ファン」までは一音節ずつ区切って、思わせぶりに。そして「トゥーッテ……？」のところでは、ロマンチックで切ないハーモニーが加わる。とても哀愁を帯びた歌いまわしだ。意訳すれば、「私のいった通りになっただろう？　わかったかい、みんなこんなことをするんだよ……」といったかんじか。

そして次。アルフォンソに促されるように男二人も唱和して、二度目の「コシ・ファン・トゥッテ！」になる。一度目とは対照的に、そしてまるで観念したかのように、この二度目の「コシ・ファン・トゥッテ」は元気に歌われる。「めげることはない、世の中こんなもの、これでいいのさ！　人生楽しいじゃないか！」とでもなるだろうか。かつて大歌手テオ・アダム（哲学者ドン・アルフォンソ役）がこの箇所で、音楽のリズムに合わせ、右手にもった杖で客席を順々に指していたのを思い出す。「コ！　シ！　ファン！　トゥ！　ッテ‼——君たちだってそうだよ、他人事じゃないんだよ！」とでもいうように。

この短い二度の「コシ・ファン・トゥッテ」は、私にとって全モーツァルト作品中でももっとも感動的な箇所の一つだ。目を見開いて真実を見つめ、その果てに絶望が訪れ、しかし「まあそんなものなのかなあ……」と思った瞬間、自分のなかで何かが弾ける。絶望がふいに希望に転じる。時に冷淡で意地悪いモーツァルトの人間観察の透徹が、オペラの最後の最後になって、突如として明るく前向きで愛にあふれた達観へ一変する。かくして男三人が退場する

と、きらめくような幸福なセレナーデが響いてきて、盛大な結婚式の祝宴の準備が始まる。皆こういうことをする、自分だってするかもしれない、そう思えば寛大になれる！　――観察の冷酷は究極の寛容に転じる。

ふつう「達観」とは後ろ向きの感情と思われがちだ。しかしモーツァルトは⑤前向きに達観する。達観した途端に目の前に希望が開ける。これは彼独特の感覚である。考えてみれば人が不幸になるとき、それは何か一つのことに固執するせいであることが多い。そして固執をやめることでもって、じつはほかにもいくらでも可能性があることに気づくことができる。この絶望からの急転直下が、モーツァルト作品の基本構図の一つであることについては、次章でもう一度述べよう。

ちなみにひょっとすると「台本を書いたのはダ・ポンテであって、モーツァルトは彼が書いた戯曲に音楽をつけただけでは？」と異論をはさみたくなる向きがあるかもしれないので、一言つけ足しておきたい。私見によればモーツァルトは、たんに出来合いの台本に音楽をつけただけではない。たとえば右の「コシ・ファン・トゥッテ」のセリフにしても、それにどんな抑揚をつけ、どんなハーモニーをつけるかでもって、ドラマの意味はまるで変わってくる。作曲家こそが脚本を最終的なドラマへと仕上げるのだ。

二流の作曲家ならいかにもやりそうだが、セリフに二回とも能天気に明るい音楽をつけたりしたら、このドラマの深みは生まれない。あるいは、必ずひどい目にあうヘタレ・コメディアン役よろしく、二回ともめげた調子で音楽にしたとしても（関西弁でいえば「ワテ、浮気されましてん……」といって自分の頭を叩くイメージだ）、やはりドラマは深くならない。同じセリフが作曲家の腕次第で不滅の傑作にもB級コメディーにもなるのだ。

考えてみてほしい。もしあなたが作曲家だとして、「みんなこうする〔コシ・ファン・トゥッテ〕」のセリフが二回書いてあるだけの台本を手渡されて、それをまさかこんな風に作曲しようなどという発想が出てくるだろうか？⑥作曲家こそオペラの最終的な作者だ。そしてモーツァルトはその意味で、まったく天才的な劇作家だった。「シェー

クスピアにも比肩する」といっても誇張にはなるまい。

注1　アンファン・テリブル　…　フランス語で「恐るべき子ども」。

問1　傍線部①「悪魔のリアリズム」とはどういうものか。説明しなさい。

問2　傍線部②「彼らは科学者と同じことをしている」とあるが、なぜそのようにいえるのか。説明しなさい。

問3　傍線部③「ぬか喜びであっても、知らぬが仏で新しい恋に突っ走る」とはどういうことか。説明しなさい。

問4　傍線部④「絶望を突き詰めることによってしか希望は生まれない」とあるが、なぜそのようにいえるのか。説明しなさい。

問5　傍線部⑤「前向きに達観する」とはどういうことか。説明しなさい。

問6　傍線部⑥「作曲家こそオペラの最終的な作者だ」とあるが、なぜそのようにいえるのか。説明しなさい。

問題二

（一〇〇点）

次の文章は『曾我物語』の一節である。万寿御前が佐殿源頼朝と結婚し、そのことを万寿の継母が手紙で北条時政に知らせた。時政は今、伊豆国の府庁にいる。これを読んであとの問いに答えなさい。

北条[注1]は思ひ延べたる方ぞなき。「姫は一人なり。婿は二人あり。目代[注2]は我が取りたる婿なり。佐殿は姫がこころざし深き婿なり。いかがはせん」とぞ思ひわづらひける。女房の方へ言ひつかはしけるは、「時政は、目代とうち連れ府庁にとどまり候ひぬ。当時は神拝さらに隙なく、参り得ず候ふ。都にて目代を婿に取りて候ふ。急ぎ姫を具足し[注3]て来たらせたまふべし」とありければ、継母の女房、大きに喜びて、「万寿を目代の方へつかはすものならば、我が娘を佐殿に合はせんものを」と内々に喜ばれけるこそはかなけれ。やがて姫君を呼びまゐらせ、「これこそ北条殿の御文よ」とて見せられければ、姫君これを御覧じて、胸もうちふたがり、泣くよりほかのことぞなき。継母、「こは。とくとく出で立ちたまへ」と責めたてまつりたまひければ、姫はこれを聞くにつけても、「まことの母ならば、これほどになさけなきことはよもあらじ」と思ふにぞ、いとど涙は進みける。思ひ分けたる方ぞなき。出で立たんとすれば恩愛の別れも悲し。また、とどまらんとすれば不孝の罪のがれがたし。

折節、佐殿はものへ御他行[注4]のあとなり。馴れこし方の事どもを語りおくべきやうもなし。「ともかくも行きてこそみめ」と思はれければ、心ならず出で立ちたまふ。泣く泣く御文をあそばして、とどめおかんとせられければ、佐殿はものより帰りたまひける。北[注5]の方は濡れしほたれておはします。

佐殿、この御ありさまを御覧じて、「こは何ごとぞ」とおほせければ、北の方、涙をおさへて、「親にてさぶらふ時政、都にてわらはを目代に約束し候ふなるほどに、府庁より使あり。親の命にしたがはんとすれば、恩愛離別の苦しみに胸を焦がしぬ。偕老[注6]のなさけを忘れじと思へば、不孝の罪のがれがたし。とにもかくにも、もてあつかうたる我が身の置きどころなきこそ悲しけれ」と伏し沈みたまふぞわりなけれ。佐殿もともに袖をぞしぼられける。

継母の御方よりは、「何とて遅うまします」と御使しきりなり。さてあるべきことならねば、「まかり出でなん」とて泣きたまへば、佐殿も御涙をおさへ、「これまで思ひ寄りたまふ御こころざしのほどこそありがたけれ。今生こそむなしく離れたてまつるとも、後生にてはかならずよ」と仰せられもはてず、そぞろに袖をぞしぼられける。北の方は佐殿の御ありさまを見たてまつり、泣く泣く仰せられけるは、「あひかまへて御心を移しなくして待ちたまふべし。目代のもとにては、一夜もこの身をとどむべからず。もし逃げ損ずるほどならば、いかなる淵瀬にも身を投ぐべし。後世をばとぶらひたまはるべし。また、逃げすましぬるものならば、落ち着かんところより、急ぎ御文を奉るべし。使と連れて入らせたまへ。いとま申して、我が君」とて、継母の方へ入らせたまふ。

継母の女房より佐殿の御方へ、「これにも姫がさぶらへば、御つれづれをも慰みおはしませ」と申しおきて、万寿御前を引き具して、府庁へとてぞ急がるる。古きすみかをうち捨てて、思はぬ館に移るべしとは、かけても思はぬ身なれども、「父に大事をかけじ」とのはかりごとなれば、ありとぐべき館にてはなけれども、上ばかりはさらぬやうにもてなしたまへども、ただ過ぎにし方のみ恋しくぞ思ひたまひける。

（『曾我物語』より）

注1　北条…北条時政。　注2　目代…知行国主の代官として現地に赴任する者。ここでは平兼隆。　注3　具足…引き連れること。
注4　他行…外出。　注5　北の方…万寿御前。　注6　偕老…ともに老いること。

問1　二重傍線部「とどめおかんとせられければ」を解答欄に書き写し、例にならって品詞分解しなさい。

【例】

にはかに	宮	へ	渡ら	せ	たまふ	べか	なる	を
形容動詞・連用形	名詞	助詞	動詞・未然形	助動詞・尊敬・連用形	補助動詞・終止形	助動詞・推量・連体形（撥音便無表記）	助動詞・伝聞・連体形	助詞

問2　傍線部イ「はかなけれ」、ウ「よもあらじ」、オ「行きてこそみめ」、キ「かけても思はぬ」をそれぞれ現代語訳しなさい。

問3　傍線部ア「姫がこころざし深き婿」とはどのような婿か。説明しなさい。

問4　傍線部エ「不孝の罪」とはこの場合、どのような罪か。分かりやすく説明しなさい。

問5　傍線部カ「あひかまへて御心を移しなくして待ちたまふべし」とあるが、なぜそういえるのか。説明しなさい。